５　「物語」　─中世の擬古物語

16年度　日本大学

★　次の文章は、平安時代に原作が書かれ鎌倉時代に改作された中世王朝物語『住吉物語』の一節で、継母の計略から逃れるために乳母子の「侍従」を伴って住吉の尼君のもとに身を隠した「姫君」を、その恋人である少将（昇進して中将）が初瀬観音のお告げにより探し当てる場面である。これを読み、後の問いに答えよ。

　さてａには、その暁、姫君の、「夢に、の世に心細げにて、山中にただ一人①草枕して泣き伏しｂ給ふ所へ行きたりつるに、われを見つけて１袖を控へてかくなむ。

　Ａ　たづねかね深き山路に迷ふかな君が住みかをそこと知らせよ

となむありつる」とあはれｃに語り給へば、侍従、「げｄにいかばかり嘆きｅ給ふらむ。まことの御夢ｆにこそ」とて、忍び音を泣き給ひけり。

　中将は、慣らはぬ旅なれば、白く②いつくしき御足にわらぐつ当たりて、血あへて行きやらぬ③気色なれば、道行く人も目をとめ見ｇ参らせけり。遙々と①涙にくれ行き、松の下にて、

　Ｂ　暁の夢を④頼みてたづぬれど住吉とだに言ふ人もなし

とながめおはしければ、年十四五ばかりなる童、松の落葉を拾ひけるを②召して、「をのれはいづくの者やらむ。このわたりをば何と言ふぞ」と仰せあれば、「住吉となむ申す所なり」と申せば、いといとうれしくて、「このあたりにさるべき人や住み給ふ」とたづね給へば、童、「の事や」と申せば、「さても都人など住むか」と③問ひ給へば、「住の江と申す所に、尼上とて、京の人ませ、…」と申しければ、それをしるべにてたづねおはしければ、江に造りかけたる家の、さびしき宿の気色、月はの絶え間よりほのかにさし入りて、いと物あはれなり。

　日も暮れければ、松のもとにて、「Ｘば問ひてまし」などおぼしておはしけるに、

　Ｃ　白浪の行方も知らぬ君ゆゑにたづねてぞ寄る住吉の松

ながめ給ひて２たたずみければ、さらぬだに旅の空は悲しきに、夕浪千鳥あはれに鳴きわたり、岸の松風身にしみて、

　Ｄ　わが思ふ人もなぎさにたづね来て満ち来る潮に身をや投げアまし

と心細く立ちわづらふ。

　琴の音ほのかに聞こえけり。「この声、べてに弾きｈ給ひしが」と思ふに、胸うち騒ぎて聞き給ひけむ心、３言へばおろかなり。「あな⑤ゆゆし、イ人のしわざにはよも」など思ひながら、その音に誘はれて、何となく立ち寄りて聞き給へば、釣殿の西面に若き声して、琴かき鳴らす人あり。「都にてかかる所も見ざりしものを、の松風琴を調ぶる心地して、ウ心あらむ人に見せばや」など④うち語らひて、「Ｙさあらぬだに、秋の夕は常よりも物憂きに、旅の空はあはれなる」などうちながむる声、侍従に聞きなして、胸うち騒ぐ。

　心を静めて、なほなほ近く寄り聞き給ふに、姫君の御声にて、「あはれなる松風かな」とて、

　　たづぬべき人もなぎさの住の江に誰松風の絶えず吹くらむ

と４うちながむるを聞けば、姫君なり。

（注）　１　住の江―住吉の古称。

　　　　２　少将殿―後出の「中将」を指す。

　　　　３　おはしませ―「いらっしゃいますが…」の意。

　　　　４　「人ならば問ひてまし」―「住吉の岸の姫松人ならば幾世か経しと問はましものを」（『古今集』）に拠る。

　　　　５　律に調べて盤渉調に―律（音調名）で調律して盤渉（音名）を主音とする調で、の意。

問１　傍線部１～４の解釈として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選べ。

　　　　　　　　　　　　　　①　袖をとらえて

１　「袖を控へて」　　　　　②　袖を濡らして

　　　　　　　　　　　　　　③　袖をかかげて

　　　　　　　　　　　　　　④　袖を振って

　　　　　　　　　　　　　　①　立ちつくしたので

２　「たたずみければ」　　　②　うろうろしたところ

　　　　　　　　　　　　　　③　うずくまったので

　　　　　　　　　　　　　　④　途方にくれたところ

　　　　　　　　　　　　　　①　言い尽くせない

３　「言へばおろかなり」　　②　口にすべきでない

　　　　　　　　　　　　　　③　言うまでもない

　　　　　　　　　　　　　　④　口にするのがへただ

　　　　　　　　　　　　　　①　ぼんやり遠くを見やる

４　「うちながむる」　　　　②　一点をじっと見つめる

　　　　　　　　　　　　　　③　もの想いにふける

　　　　　　　　　　　　　　④　声をひいて朗誦する

問２　傍線部ア「まし」と意味用法が同じものを、次の傍線部の「まし」から一つ選べ。

①　秋の野に道もまどひぬ松虫の声するかたに宿や借らまし（『古今集』）

②　見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし（『古今集』）

③　見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせましや

（『土佐日記』）

④　うちわびて落ち穂拾ふと聞かませば我もに行かましものを

（『伊勢物語』）

問３　傍線部イ「人のしわざにはよも」の下に省略された表現として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　あらず　　②　あらむ　　③　あらじ　　④　あらまし

問４　傍線部ウ「心あらむ人に見せばや」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　風流心のあるような人ならこの景色をご覧になりたいでしょうね

②　良心的な人に自分たちの境遇をなんとか知らせたいものですね

③　教養のある人に都のすばらしさをわかってもらいたいものですね

④　情緒を解するような人にこのすばらしい景色を見せたいものですね

問５　波線部①～④のうち、動作主体が他と異なるものを、次の中から一つ選べ。

①　涙にくれ行き　　②　召して

③　問ひ給へば　　　④　うち語らひて

◎問６　本文中の和歌Ａ～Ｄに関する説明として正しいものを、次の中から一つ選べ。

①　Ａは三句切れで、姫君を探している少将の嘆きを詠んでいる。

②　Ｂは句切れがなく、掛詞と縁語を用いて姫君の嘆きを詠んでいる。

③　Ｃは四句切れで、少将に会えない姫君の悲しみを詠んでいる。

④　Ｄは初句切れで、掛詞を用いて少将の絶望を詠んでいる。

問７　『住吉物語』は「継子いじめ」を題材としているが、同じように「継子いじめ」を題材とする作品を次の中から一つ選べ。

①　落窪物語　　②　大和物語

③　平中物語　　④　狭衣物語

【確認問題】

１　傍線部①～⑤の本文中の意味として適当なものをそれぞれ次から選べ。

①　ア　粗末な寝具　　イ　旅寝

　　ウ　原野の旅　　　エ　彷徨

②　ア　端正で美しい

　　イ　子どもっぽくかわいい

　　ウ　雄々しくたくましい

　　エ　懐かしく親しみ深い

③　ア　顔色　　イ　風景

　　ウ　色彩　　エ　様子

④　ア　あてにし　　イ　お願いし

　　ウ　記憶し　　　エ　想像し

⑤　ア　恐れ多い

　　イ　不吉だ

　　ウ　大変なことだ

　　エ　すばらしい

２　波線部ｂ・ｅ・ｇ・ｈの敬語は、誰に対する誰の敬意か、それぞれ次から選べ。

ア　中将（少将）　　イ　姫君

ウ　侍従　　　　 　エ　尼上

オ　道行く人

カ　年十四五ばかりなる童

キ　語り手（作者）

ｂ　［　　　］に対する［　　　］の敬意。

ｅ　［　　　］に対する［　　　］の敬意。

ｇ　［　　　］に対する［　　　］の敬意。

ｈ　［　　　］に対する［　　　］の敬意。

３　波線部ａ・ｃ・ｄ・ｆの「に」の文法的説明として適当なものをそれぞれ選べ。

ア　格助詞

イ　接続助詞

ウ　完了の助動詞「ぬ」の連用形

エ　断定の助動詞「なり」の連用形

オ　形容動詞の連用形語尾

カ　副詞の一部

ａ［　　　］　ｃ［　　　］

ｄ［　　　］　ｆ［　　　］

４　点線部「やらむ」を省略しない形で品詞に分解して説明した次の空欄を埋めよ。

「（　１　）」：（　２　）の意味の助動詞「（　３　）」の連用形

「や」　：（　４　）の意味の係助詞

「（　５　）」：（　６　）活用の（　７　）詞「（　８　）」の未然形

「む」　：（　９　）の意味の助動詞「（　10　）」の連体形

１（　　　　　　）　２（　　　　　　）

３（　　　　　　）　４（　　　　　　）

５（　　　　　　）　６（　　　　　　）

７（　　　　　　）　８（　　　　　　）

９（　　　　　　）　10（　　　　　　）

【補充問題】

５　傍線部Ｘ「人ならば」の主語は何か。本文中の一語で答えよ。

［　　　　　　　］

６　傍線部Ｙ「さあらぬだに」とはどういうことか。指示内容を明らかにして十字以内で訳せ。

［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

７　「たづぬべき…」の和歌の修辞について説明した次の文の空欄にあてはまる語をそれぞれ漢字交じりで答えよ。

「なぎさ」は、「渚」と「人も（　１　）」とが掛けられている。また、「松」には「（　２　）」の意味が掛けられている。

１＝（　　　　　）２＝（　　　　　　）

【解答】

問１　１＝①　２＝①　３＝③　４＝④

問２　①

問３　③

問４　④

問５　④

問６　①

問７　①

【確認問題】

１　①＝イ　②＝ア　③＝エ　④＝ア　⑤＝エ

２　ｂ＝アに対するイの敬意。　ｅ＝アに対するウの敬意。

　　ｇ＝アに対するキの敬意。　ｈ＝イに対するアの敬意。

３　ａ＝ア　ｃ＝オ　ｄ＝カ　ｆ＝エ

４　１＝に　　　　２＝断定　３＝なり　４＝疑問　５＝あら

　　６＝ラ行変格　７＝動　　８＝あり　９＝推量　10＝む

【補充問題】

５　松

６　旅の空でなくてさえ（９字）

７　１＝無き　２＝待つ

【現代語訳】

　さて住の江には、その明け方、姫君が、「（私が）夢で、少将殿が実に心細そうに、山中にただ一人旅寝して泣き伏しなさるところへ行き着いてしまったところ、（少将が）私を見つけて袖をとらえてこのように（詠んだ）。  
　　（姫君の行方を）尋ねかねて、深い山中（初瀬）の道に迷うことよ、あな

　　たの住み家を「そこだ」と知らせてくれ。

と（歌を）詠んだ（という夢を見ました）」としみじみとお話しになったので、侍従は、「本当に（少将＝中将殿は）どれほどお嘆きになっているであろう。（姫君がご覧になったのは）本当の御夢である（のでしょう）」と言って、声を立てずにお泣きになった。

　中将は、慣れない旅であるので、白く端正で美しい御足に藁靴があたって、（足から）血が出て進むことができない様子であるので、道行く人も目をとめて見申し上げた。（そのようにして少将は）遙々と涙にくれ（ながら）旅を続け、松の下で、  
　　　明け方に見た夢をあてにして尋ねてきたが、（ここが）住吉だと（教えて）

　　言う人さえもない。

と、（中将が）吟じていらっしゃったところ、十四、五歳ほどである童が、松の落ち葉を拾っ（てい）たのを（見つけて）呼び寄せて、「おまえはどこの者であろう。このあたり（の地名）をなんと言うのか」とおっしゃると、「住吉と申すところだ」と申し上げたので、（中将は）たいそう嬉しくて、「このあたりにそのような（氏素性がしっかりした）人はお住みか」とお尋ねになったところ、童が、「神主殿のこと（をお尋ねなのだろう）か」と申し上げたので、（中将が）「それはそうと都の人などが住んでいるか」とお尋ねになったところ、（童が）「住の江と申し上げるところに、尼上といって、都の人がいらっしゃいますが、…」と申し上げたので、（中将が）それ（＝童の言葉）を頼りにお尋ねになったところ、（そこには）入り江に掛け渡して作った家で、寂しい家の様子で、月は梢の間からほのかに差し込んで、たいそうしみじみした様子である。

　日も暮れたので、（中将が）松の根元で、「（この松が）人ならば（姫君の所在を）質問するだろうに」などとお思いになっていらっしゃったときに、  
　　　白波ではないが、行方も知らないあなたのために、（私は）尋ねて立ち寄

　　る住吉の松であることよ。

と吟じなさって立ちつくしたので、そうでなくてさえ旅の空は悲しいのに、夕波に鳴く千鳥が辺り一面にしみじみと鳴き、岸の松風（も）身にしみて、  
　　　私の思う人（＝姫君）もいない渚に尋ねてきて、いっそ満ちてくる潮に

　　身を投げてしまおうか。

と心細く立ち去りがたく思う。

　琴の音がかすかに聞こえ（てき）た。「この音は（どうしたことか）、（姫君は）律で調律して盤渉を主音とする調べでお弾きになっていたが」と思うときに、（姫君を思い出し）胸が騒いでお聞きになったであろう（中将の）心は、言うまでもない。「ああすばらしい、人のしわざではまさか（ないであろう）」などと思いながら、その音に誘われて、なんとなく立ち寄ってお聞きになると、釣殿の西面に若い声で、琴をかき鳴らす人がある。「都でこのような場所も見なかったのに、峯の松風が琴を弾く（ような）気がして、情緒を解するような人に（このすばらしい景色を）見せたいものですね」などと（姫君は）何気ない様子で語らって、「そう（＝旅の空）でなくてさえ、秋の夕方はいつもよりももの悲しいのに、旅先で眺める空となるとしみじみと心動いてしまう」などと吟ずる声（を）、侍従（の声だと）聞きなして、（中将は）心が何となく騒ぐ。

　心を静めて、さらにさらに近く寄ってお聞きになったところ、姫君のお声で、「しみじみと趣深い松風であることよ」と言って、  
　　　尋ね（て来）るはずの人もいない渚の住の江に、誰を待って松風が絶え

　　ず吹いているのだろう。

と声をひいて朗誦するのを（中将が）聞くと、（その声は）姫君である。